教育映画祭優秀作品賞　　芸術祭優秀賞

伝統工芸記録映画

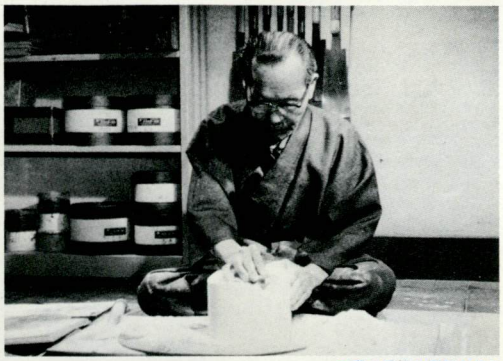
彫漆

カラー
30分

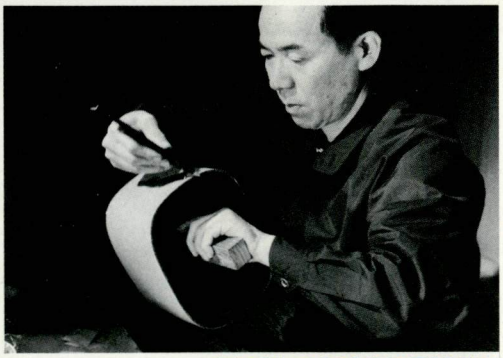
―音丸耕堂のわざ―

企画：文化庁　　製作：英映画社

伝統工芸記録映画　**彫　漆**　―音丸耕堂のわざ―



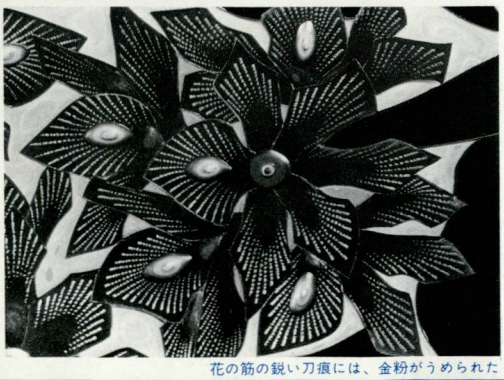
石膏で手箱の原形を作る



麻布の素地に７色の色漆を47回塗り重ねる

布袋葵の花を地の白漆まで正確に彫り下げる

側面の布袋葵の葉の斑文を彫る



花の筋の鋭い刀痕には、金粉がうめられた

■製作意図

この映画は、一般に人間国宝とよばれている重要無形文化財「彫漆」の保持者、音丸耕堂氏の「彫漆布袋葵文手箱」の製作過程を克明に記録したもので、漆芸などの工芸作家に対して、製作に直接役立つ資料を提供するとともに、広く一般の人々にも漆芸の素晴しさと、作家の製作活動の苦労の一端を伝えて、関心を高めるために企画された。

■解　　説

二十代から三十代にかけての若い音丸耕堂氏が、すでに確かな技倆と優れた意匠力を身につけていたことを物語る作品二点が、まずこの映画の冒頭に現われる。

そのひとつは、様々の昆虫を肉高く彫った「堆朱板文庫」である。もうひとつは黒漆を彫った「堆黒游蟹之図料紙文庫」で、塗り重ねで生じる濃淡の層を、巧みに生かした躍動的で力強い作品である。

次に「彫漆紫陽花香合」を彫る音丸氏の冴えた技を、ハイスピードカメラが鮮やかにとらえている。鋭い刀が固い漆の層を、黒から白へ、そして青へと微妙に彫り下げて行く様子は興味深い。

朱と白という配色で、抽象的な彫刻技法を見せる「彫漆四ツ葉文茶入」と、カタツムリが列をなして下ってくるという機智に富んだ意匠の「彫漆蝸牛花瓶」の、華麗な部分が接写で紹介される。

「堆漆ホロホロ鳥香合」は、荒彫りから仕上げまでの製作過程が示される。

黒漆とウルミ色(濃茶)の漆を、交互に千数百回も塗り重ねた固まりから、音丸氏はうずくまるホロホロ鳥を小刀で巧みに彫り上げた。

今回、「彫漆衣袋葵文手箱」の製作にあたり、夏の朝、音丸氏は池に咲くみずみずしい布袋葵の花を写生して意匠を考える。この立体的な題材を、手箱の上の平面にどのように展開させるか、様々なイメージが脳裏に去来する。

構想がまとまると、まず石膏で適当な固まりをつくり、大きなノミで原型を削り出す。

型が出来ると糊漆で寒冷紗や数枚の麻布を貼り重ね、下地の上に黒漆を塗り重ねて、最後に内側から石膏型をとり除く。軽くて丈夫な乾漆様地の完成である。

音丸氏は彫り上った時の効果を考えて、配色を工夫し、それぞれ塗りの回数を決める。

黒８、黄１、朱１、黄１、白７、うす藤５、藤５、紫５、黒７、白１、黒６、計47回である。

黄と朱は花の芯であり、藤や紫は花弁となり、黒は葉で、白は水面を表わす。

色漆の調合。発色を良くする朱合漆と、堅牢な漆の層をつくる木地呂漆とを半々に混ぜ合わせて顔料と練る。漆は一度に厚く塗ると縮みが生じやすいので、ガラスの小片に漆を塗布し漆風呂に入れて、その乾燥具合を慎重に見きわめてから塗りが始まる。

こうして手箱は塗っては乾かし、研いでは塗るうち季節はいつしか秋に移った。

黒く塗り込められた手箱に白粉で下図を描く。手箱の蓋になる表面の意匠は何度も検討され、最終的には三株の衣袋葵で構成された。

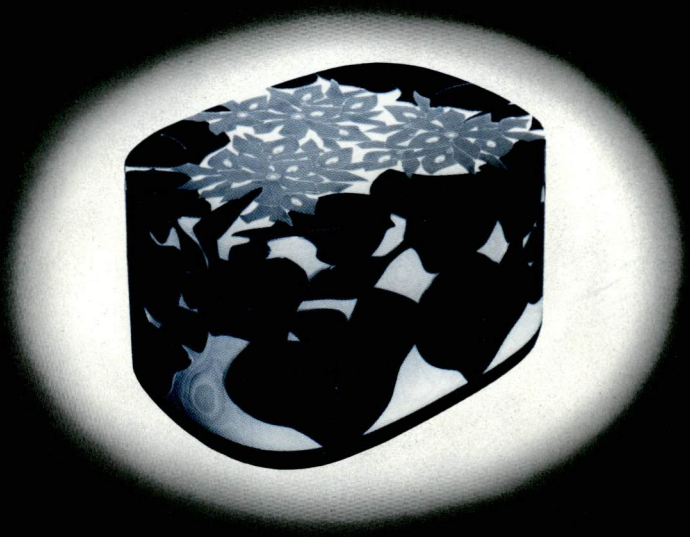
下図の線彫りが済むといよいよ荒彫りである。長年鍛えぬかれた音丸氏の冴えた技は、固い漆の層を正確に、目指す色漆の深さまで切り下げ、素早く削り出して行く。文様は一気に彫り下げるのではなく、一段階の彫刻が終ると新しく現われた漆の層を、数日間十分に乾燥させて、漆の光沢を出させてから彫るという手順で行われる。良く研がれた刀がよどみなく手箱の上を走る。

短かい秋は終り冬がきた。花の芯など細部の彫りも済み、入念に研ぎ出され、漆独得の艶が出る。続いて蒔醬の手法で、葉に金の斑文を表わした。最後に花弁の筋を、鋭い刃先で浅く引っ掻くように刀痕を付ける。そこへ漆を摺り込み、金粉を付けて拭きとると、きらびやかな金色が光る。この手法が沈金である。

まだ浅い春の朝、８ヶ月の月日を経て「彫漆布袋葵文手箱」は完成した。

手箱の寸法　　巾　18.0センチ、奥行　24.0センチ、高さ　13.5センチ。

完成した「彫漆布袋葵文手箱」



音丸耕堂氏の経歴

明治31年、香川県高松市で生まれる。はじめ石井磬堂について木彫や彫漆を学ぶとともに、幕末の頃に高松で活躍した名匠玉楮象谷の作品を模刻しながら、その堆朱、堆黒、蒟醤、そして存星などの優れた技術を習得した。昭和12年上京して作家活動に入る。

昭和17年「彫漆夕顔の図手箱」文展特選

昭和24年「彫漆水葵の図屏風」日展特選

従来の彫漆の色彩はそのほとんどが単調であったが、音丸氏は近年開発された退色に強い色漆を用いて、豊富な色漆の層を作り、写実的な彫刻の他に幾何的な曲面の組合わせなどを試み、新工夫を加え彫漆の表現を大きく拡げている。

昭和30年重要無形文化財「彫漆」の保持者に認定される。

昭和42年紫綬褒章受章

昭和48年勲四等旭日章受章

現在日本工芸会理事

用語の解説

彫漆　漆を何回も塗り重ねておいて、これに文様を彫刻して漆の層を現わす技法の総称

堆朱・堆黒　朱（黒）漆を何回も塗り重ねておいて、これに文様を彫刻する技法

沈金　漆塗りの面に、鋭利な刀などで文様を彫り、凹部に漆を入れ、その上に金箔や金粉を置く。そのあと拭きとると文様のくぼみに金が残る

蒟醤　漆塗りの上に、鋭利な刀などで文様を線彫りし、そのくぼみに色漆などを象嵌する技法

製作スタッフ

製作	高橋銀三郎	照明	前田基男	解説	城　達也
脚本演出	山添　哲	音楽	一柳　慧	録音	甲藤　勇
撮影	宮下英一・小林　治	効果	小森護雄	現像	東洋現像所

芸術の香り高い名作シリーズ

1974年教育映画祭・文部大臣賞　芸術祭・優秀賞
毎日映画コンクール・教育文化映画賞

文部省特選 **日本の稲作**

—そのこころと伝統—

現代に伝承されている稲作とその祭りを通じて、日本文化の実相を明らかにする。

カラー42分

芸術祭大賞・教育映画祭最高賞

文部省特選 **京都の川**

古都に展開する遺跡や文化財から、人間の歴史を探ぐる。

カラー34分

芸術祭大賞・文部大臣青少年映画賞

文部省特選 **くらしを描く**

大地に汗する親たちの生活を絵画に表現する子どもたちの記録。

カラー36分

教育映画・記録映画・PR映画・企画製作

HEF

株式会社 英映画社

〒104　東京都中央区八重洲2－6－13 幸田ビル　電話　東京（281）3414．3415．4680